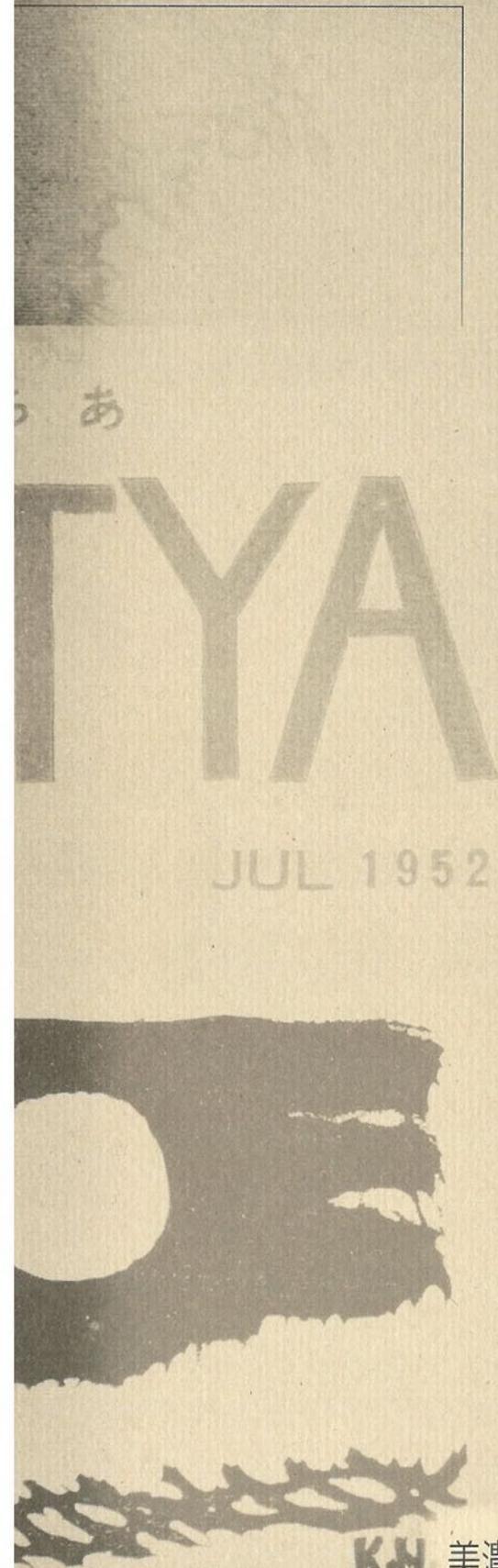


「地方」文化のつくりびと

— 詩人・長尾和男と若葉文藝 —



狂俳の精神と長尾和男

可児 光生

〈一〉

大正二五年(一九二六)九月、詩集『隠沼』で「花々しく詩壇にデビュー」(注1)した長尾は、翌年の春、東洋大学を卒業とともに郷里、岐阜へ戻り、加茂農林学校教師となった。その時の心境を彼は次のように語っている。

「昭和二年四月岐阜の田舎に職がみつかる、(中略)ぼくは止まるべき東京を捨てて田舎落ちをした。これは自ら刺戟ある都会をすてて易きにつく消極的な行為であつて、今にして思えば甚だ残念な決断であつた。(中略)ぼくは田舎へ入つて生活の面では安定したが、詩への執心は一日も捨てなかつたにかかわらず、その詩の制作の上では袋小路に追いつめられてしまった。」

そんな時に「田舎」で出会つたのが、「狂俳」であつた。

〈二〉

美濃では、江戸中期以降「冠附」(かむりづけ)狂俳が流行した。最初の五音が出題され、これに続けて七・五つけて一句にまとめるもので、庶民には難しい俳諧にわかるものとして大に行われた。文芸ではあるものの、日常生活に密着し、そこからヒントを得て風雅とユーモアを楽しむ娯楽的要素が強いものだった。社寺に奉納された作品が奉額として現在も各地に残っている。狂俳は近代に入つて更に広がりを見せて

規模が大きくなると、寺などで「狂俳大会」が行われた。昭和三年(一九二八)には、上古井・禅隆寺で狂俳大会が開催され、二万三六五九点の狂俳が集まつた(注2)。当時の隆盛ぶりが窺える。

古井町の高橋余一(一八九八〜一九九三)は、大正から昭和にかけての様子を次のように記している。

「七五調の軽口や日常生活、社会風刺、季感などを詠んだ狂俳は当時の人々にとって一番親しみ易く庶民的な楽しみで、その会合は何よりの文化交流の場であつた。大正末期になり加茂農林校長橋本隆吉氏(甘氷)、部下の大塚三市氏(春洋)と共に先輩格の秀耕、梅朗氏などと、その風格高い句作でマンネリ化した古井の狂俳・俳句に新風を吹き込まれた。」(注3)

〈三〉

高橋が記した橋本甘氷(生没年不明)は、「如月会」を主宰するとともに雑誌『きさらぎ』を創刊(注4)、校長の傍らこの地域の文芸の指導を行うようになったようである。「如月会」は昭和二年当時、発行所を橋本のもと(古井町上古井一の二)に置き、加茂郡内に一八の支部が設立されていた。特に古井町には森山、下古井、下中西組、下中東組、新開の五地区に支部があるという状況であつた。橋本甘氷のほか林鴨南(一八七五〜一九六一、本名・林魁一)、太田の脇本陣当主であり考古民俗学者でもあつた(注5)などが選者として名を連ねている。橋本甘氷は、大正一三年(一九二四)、岐阜県立岐阜農林高校の農業主任(注6)から加茂農林学校に校長として赴任していた(注6)。

いった。

同好者は誘い合わせて仲間の一軒の家に集まり、いくらかの会費を出し合い、それはマッチや石鹸といった景品代にあてられた。作品の批評や選考は仲間相互、あるいはグループの先達や有識者によって行われた。



高橋余一「美濃生活絵巻」より

長尾は昭和二年(一九二七)、加茂農林学校に着任し、ここで橋本に会い、隆盛期の狂俳の世界を知ることになる。

「私が加茂農林在職中「如月」という狂俳誌の編集事務を依頼されるようになり」と長尾は晩年述懐している(注7)。長尾は手元にこの『きさらぎ』第十四号、十五号、十七号、十九号を残している。十七号(昭和二年五月)には新会員紹介欄に「農林内 長尾霞村」の名が見え、この年の四月頃に長尾自身が会に入会したようである。同号に「三十六僧坊うづむ若葉や時鳥 霞村」と長尾の作品があるものの、誌上で確認できたのはこの一点のみで、積極的な創作活動をおこなっている様子はいかたがえな。



『きさらぎ』第17号

さて、長尾は十六、七歳のころ初めて、七、五調の詩をつくり、また短歌も手がけ「岐阜タイムス」に投書し掲載されるなどした。また同紙には、字余りの文体で一風変わった俳人・塩谷鶴平（一八七七—一九四〇）が選者をつとめる「日日俳句」という欄があり、長尾はここに興味を持って「各務野の旅松露と筆りんどう」と作品を投稿する（注8）など、若き頃は一般的な定型句に関心を寄せ創作活動もしていたようである。

長年の文芸活動を経、晩年になって長尾は、詩の創作とは別に日本詩歌・狂俳に対して研究・批評活動を行うようになる。中でも「美濃の狂俳」（注9）では、美濃地方の狂俳の歴史と実態を克明に調査し紹介している。「文学の上で高度のものでなかったかも知れないが、汗と土にまみれて働く勤勉な農業者の、レクレーション文学としての最上のものだったといえると思う」と狂俳を位置づけている（注10）。

さらに、狂俳に関し「狂俳（みのの狂俳）は風変わりである、…狂俳は古代歌のように似て没個性の面を多分に伝えている。文字を共有とし、「笑いのなかに昇華する」（注11）とその特性を分析し、日本の詩歌の未来展望について「狂俳俳句はルナルの一行詩に似ていて、外人にも理解され易い文芸だから、その意味からしても絶滅させたくない」（注12）、「とくに狂俳などにあるユーモアを紹介すれば、日本文学を理解してもらえらるだろう」（注13）など、狂俳の中にこそ日本文学の特徴が存在していると述べた。

長尾は前述「美濃の狂俳」のあとがきで「狂俳精神が形を変えて別の花を開いていると思われる点を指摘したい」と、塩谷鶴平と「SATYA」の活動を挙げた。

独特の句風で知られ、若き頃影響を受けた鶴平に関して、「…雅文調を去って散文的、庶民的であった点、狂俳の精神をユニークな形で生かしたものと筆者には考えられる。…ほうはいとして前代にみまぎつていた美濃の狂俳精神・態度が、隠然として影をおとしていることは否定できないのではなからうか」と評している。

又、自ら主宰する「SATYA」に対しては「現代美濃地方に行われている現代詩人のグループ「SATYA」などにみられる、反俗精神（反都会、反文雅）や、詩を趣味のわく内にとどめようとする節制的ポーズなども、直接のつながりは無いとしても前代の狂俳精神と決して無縁ではないと考えられるのである。」と述べた。

長尾はこのように、非雅文、庶民性といった狂俳精神が別の形となって花を開いているものとして、過去の鶴平の活動、そして自らが関わる「SATYA」の活動を挙げた。定型にはまらない自由な文体、そしてどこかに批判精神を持つ狂俳の存在は、生涯、長尾の意識の中に生き続け、彼が築いた独自の文芸世界に対して少なからぬ影響を与えたのである。

注1 長尾「ぼくの歩いた詩のみち（上）」『学芸五』、一九五七年。

注2 『美濃加茂市史』通史編、一九八〇年、九八四ページ。

注3 高橋余一『美濃生活絵巻』（下）国書刊行会、一九九〇年。

注4 第十四号が昭和二年の二月号であり、月刊誌であることから推定して、創刊は大正一五年一月だと思われる。

注5 橋本は、蜂屋柿の栽培法を記した『柿樹栽培同加工法』（大正三年）を出版した人物でもある。

注6 『岐阜県立岐阜農林高等学校九〇周年記念誌』、一九九〇年。橋本の人柄などについては、『体育館完工五十五周年記念誌』（岐阜県立加茂農林高等学校、一九六七年、18ページ、28ページ）に記載がある。

注7 長尾未定稿「狂俳の真相」「風変わりな文学」のうち「風変わりな真の郷土文学」と加筆修正している。昭和四年のメモがあり、いずれも未定稿と思われる（美濃加茂市民ミュージアム歴史資料No.19060）。

注8 前掲長尾「ぼくの歩いた詩のみち（上）」。

注9 『金城学院紀要』第二号所収、一九六五年。のち富田和子『尾張狂俳の研究』（勉誠出版、二〇〇八年）で部分的に引用されている。富田は、同書で狂俳の研究史の整理をしており、長尾の研究について「昭和初期に美濃加茂市付近で行われた興行実態を紹介され、句の形式や特徴と歴史を述べられ、…狂俳を農民文芸と位置づけられ「如月」から作品を紹介される…」としている。

注10 狂俳の流行は敗戦後にも大きな盛り上がりがあった。その広がり背景には西白川村（現在の加茂郡白川町）に疎開し、のち古井町に移り、漫俳を提唱した岡本一平の存在がある（美濃加茂市民ミュージアム『岡本一平展・世態人情を描く』二〇一三年 など参照）。岡本一平について、長尾は次のように語っている。「終戦直後の事だったが、漫画家岡本一平氏は岐阜県加茂郡古井町、神明堂（美濃加茂市古井町）に疎開していた。神明堂の岸東八郎さん方のはなれにいた。岡本氏は漫俳を唱道していた。氏は筆者に語って

いた。『漫俳は私のつけた名前である。私はかつて漫画（昔はポンチ絵といった）を創始し、その地位を絵画と同じ高さまで高めた。私はそういう人々から見下げられたものを取り上げたのである。見下げられたものを高めるといふところに私の半生をかけるスリル的パリュがあつたのだ。漫俳も文学の線まで高めねばならない。』漫俳は筆者の見るところでは、狂俳や川柳に近いものであつたようである。一平さんは、美濃の狂俳に刺戟されマンパイをはじめたのだ。」（前述「美濃の狂俳」三八ページ）。

注11 前掲長尾「狂俳の真相」「風変わりな文学」

注12 長尾「日本の詩歌の来し方行く末」『大阪経済法科大学論集第五号』一九七八年。

注13 『朝日新聞』一九七八年一月二十八日付。

「地方」文化のつくりびと―詩人・長尾和男と若葉文藝展

二〇二五(平成二七)年二月二四日(土)―三月二日(日)

編集・発行 美濃加茂市民ミュージアム

〒五〇五・〇〇〇四

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋三二九九―一

電話〇五七四・二八・一一一〇

<http://www.forest.minokamo.gifu.jp/>

印刷 有限会社 永田印刷

発行日 二〇二五(令和七)年三月三十一日 第二版

(二〇一五(平成二七)年二月二四日 初版)